研究ノート

看護学生が認知症高齢者に抱く困難に関する文献検討

松井　宏樹
滋賀県立大学人間看護学部

要旨　認知症高齢者数の増加に伴い，認知症教育の充実は，喫緊の課題とされている．そこで今回，わが国の看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容について，過去の研究で明らかにされていることを整理するために文献検討を行った．授業を受講した看護学生は，【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】，【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】，【多くの看護問題に混乱する】，【ネガティブな結果を想像し不安になる】という困難を抱いていた．また実習を経験した看護学生は，【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】，【お互いの意思が通じない】，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】という困難を抱いていた．これらの結果より，認知症高齢者の事例について，学生が看護過程を展開する場合，学生が認知症高齢者をイメージできるよう，具体的に患者情報を記載するとともに映像教材等を活用し，学生のイメージを補う必要性が示唆された．また，認知症高齢者が「拒否」等の感情を表出した原因について，学生がアセスメントできるように，学習支援を行う必要性が示唆された．
キーワード　看護学生，認知症，困難

Ⅰ．背　景

わが国の認知症患者数は増加し続けている．2012 年における認知症患者数は，476 万人と推計されたが，2025 年における同患者数は，675 万人と推計されている（二宮，清原，小原，米本，2015）．このように，わが国の認知症患者数は約 10 年間で 1.4 倍以上増加することが見込まれている．さらに 2040 年には，認知症患者数は，802 万人に達すると推計されており（二宮ら，2015），認知症患者数は，ますます増加すると考えられる．

この患者数の増加に伴い，現在では一般病院に認知症高齢者が入院することも珍しくない．日本老年看護学会は，高度専門医療機関・一般病院等に入院している患者のうち，約 3 割の患者に認知症もしくは認知機能低下が認められたことを報告している（日本老年看護学会老年看護政策検討委員会，2014）．そのことに伴い，看護学生が認知症高齢者と関わる機会も増加している．そのため，看護基礎教育課程における認知症教育の充実は喫緊の課題とされている（種市，2017）．認知症高齢者と関わった経験が乏しい看護学生が認知症を理解しやすいように，認知症模擬患者を活用したシミュレーション学習（百瀬，2017）や認知症サポーター養成講座を講義の一貫として導入している（向井，2017）教育機関も見られる．

しかし，認知症の症状は，認知症をもつ本人が生活している社会と文化的状況に強く関連して生じる（World Health Organization：以下，WHO，1992）．特に，徘徊・興奮等の行動・心理症状（Behavioral and psychological symptoms of dementia：以下，BPSD）は，本人の生活史や居住環境等に影響を受けて生じることが報告されている（山口，2018）．つまり，認知症高齢者を取り巻く環境の違いにより，さまざまな症状が出現するといえる．

そのため，基本的な認知症の症状について学習している看護学生であっても，その症状の多様性により，認知症高齢者との関わりに困難を感じ，否定的なイメージを抱きかねない．先行研究においても，認知症高齢者に対する看護学生のイメージは，やや否定的であったことが

Literature review on the difficulties felt by nursing students in interaction with demented elderly

Hiroki Matsui

School of Nursing, The University of Shiga Prefecture

2019 年 9 月 30 日受付，2020 年 1 月 16 日受理
連絡先：松井　宏樹
滋賀県立大学人間看護学部
住　所：滋賀県彦根市八坂町 2500
e-mail：matsui.hi@nurse.usp.ac.jp

明らかにされている（桂，佐藤，2008）．さらに，認知症高齢者に対する看護学生のイメージは，授業や実習での経験に影響を受けることも報告されている（松本，2010）．これらのことを踏まえると，看護学生が学習活動を通して，認知症高齢者に抱いた困難の内容を明らかにし，学生が認知症高齢者を肯定的に捉えられるよう学習支援を行っていく必要があると考えられる．

今回，看護学生が認知症高齢者について抱いた困難の内容について，先行研究で明らかにされていることを整理し，教授方法に示唆を得ることを目的として文献検討を行ったので以下に報告する．

Ⅱ．目　的

本研究の目的は，文献検討により，わが国の看護学生が認知症高齢者について抱いた困難の内容を整理し，教授方法に示唆を得ることである．

Ⅲ．用語の定義

困難：困難とは，「①苦しみ悩むこと．②ものごとをなしとげたり実行したりすることがむずかしいこと．難儀.」と定義されている（新村，2018，p1125）．本研究でいう困難とは，看護学生が認知症高齢者に対して難しいと感じた事象および，それに付随する苦しみや悩みといった否定的な感情のこととする．

Ⅳ．方　法

A．対象文献の選定

本研究では，文献検討により，わが国の看護学生が認知症高齢者について抱いた困難の内容を整理することを目的とした．そのため，対象文献を国内文献に限定し，医学中央雑誌 Web 版 Ver5 および Google Scholar を使用した．

医学中央雑誌Web版で,「認知症 and 看護学生 and 困難」をキーワードとし,絞り込み条件を「原著論文」とした．また，厚生労働省が「痴呆症」を「認知症」という呼称に変更することを決定した 2004 年から 2019 年までを検索期間として文献検索を行った．

次に，Google Scholar で「認知症 and 看護学生 and 困難 and 原著論文」をキーワードとし，検索期間を 2004 年から 2019 年として検索を行った．さらに，看護学生が認知症高齢者に抱いた困難について広く文献を収集する目的で，ハンドサーチを行った．

システマティックレビューおよびメタアナリシスのための優先的報告項目（Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-analyses；以下, PRISMA）（卓，吉田，大森，2011）で公表されたフローチャートを参考にし，文献を選定した．

まず，特定された文献から，重複文献を除外した．次に，①文献検討，資料，総説，委員会報告，特集，連載，抄録，②看護学生を対象にしていない文献，③看護学生が認知症高齢者に抱いた困難について記述していない文献を除外し，適格性が評価された文献を抽出した．

B．看護学生が認知症高齢者に対して抱く困難についての質的記述的分析

選定した文献の内容を精読し，看護学生が認知症高齢者に抱いた困難についての記述を抽出した. 本研究では，選定文献に記述されている内容が，認知症高齢者に対して抱いた看護学生の困難に該当する場合，記述の抽象度を問わずに抽出した．それらの記述の類似性に着目し，分類を行った．

なお，選定文献に記載されている記述を抽出する際には，文脈の意味を損なわないよう最大限配慮した．

Ⅴ．結　果

A．選定文献（図 1）

医学中央雑誌 Web 版で検索を行った結果，21 件の文献が抽出された．次に，Google Scholar では，188 件の文献が抽出された．さらに，ハンドサーチにより，4 件の文献を追加した．そして，**図 1** のように文献を選定した結果，15 件の文献が質的統合に採用された．

B．看護学生が認知症高齢者に対して抱いた困難の内容

以下に，授業を受講した看護学生が認知症高齢者に対して抱いた困難の内容および実習を経験した看護学生が認知症高齢者に対して抱いた困難の内容について説明する．

1．授業を受講した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容（**表 1**）

授業を受講した看護学生の困難は，4 つのカテゴリーに分類された．文中では，カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを＜　＞，コードを『　』で示す．

【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】では，＜認知症高齢者の状態を想像しづらい＞，＜認知症高齢者の理解度を把握することが難しい＞というように，学生は，認知症患者の状態や理解度を想像することに困難を感じていた．

＜認知症による症状を捉えにくい＞には，『認知症の疾患理解が難しい.』，『脳梗塞後遺症と血管性認知症，どちらが起因なのか，どちらも関係しているのか，掘り

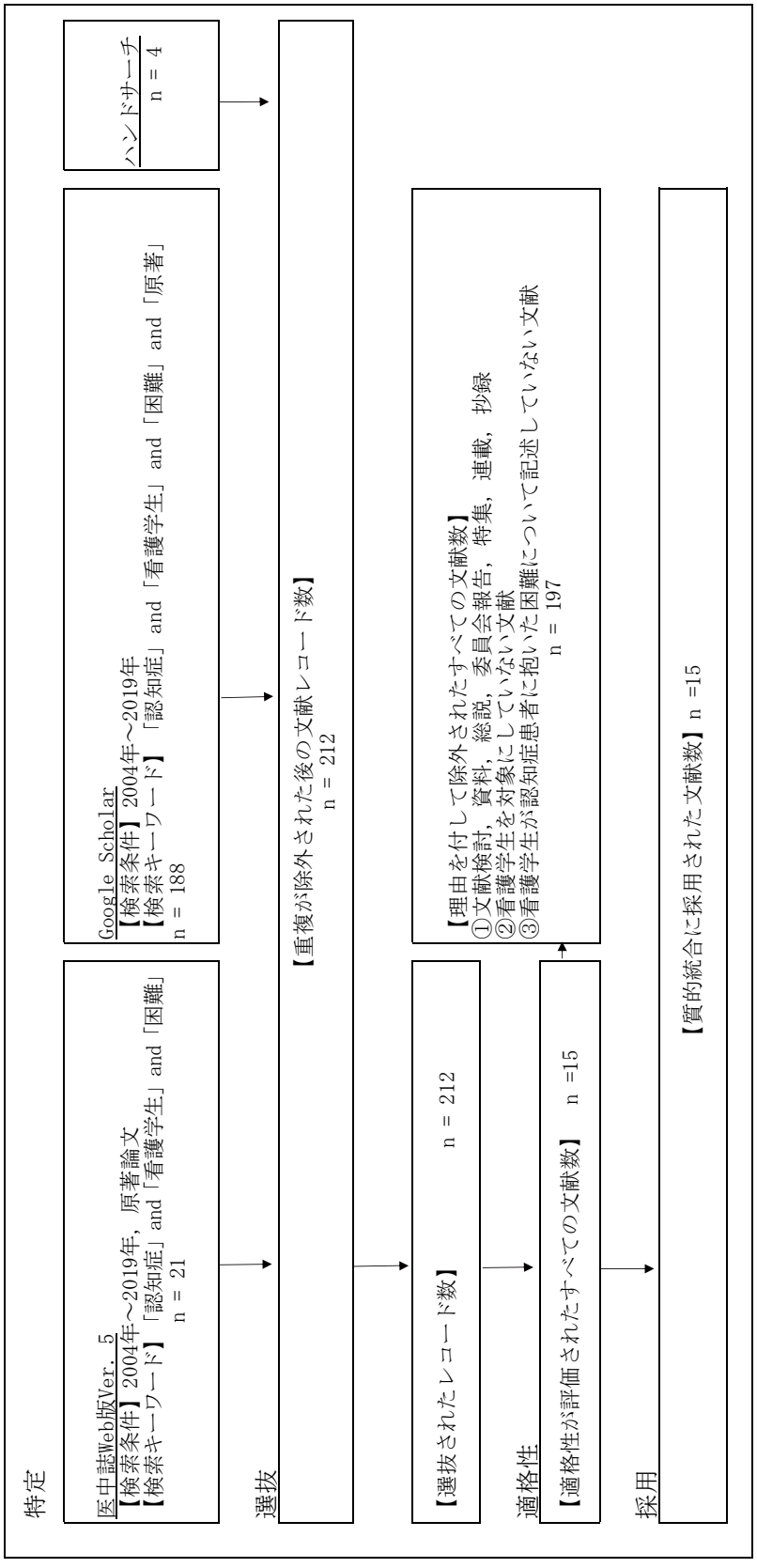

図 1　対象文献の選定プロセス

下げていけばいくほど混乱してきた.』等が含まれ，学生は，認知症によって引き起こされる症状を理解することに困難を感じていた.

＜認知症による日常生活への影響を捉えにくい＞には，『認知症が日常生活へどのように影響を及ぼしているのかを分析するのが難しい.』，『各機能的健康パターンで認知症の影響を考えながらアセスメントするのが難しい.』等が含まれ，学生は，認知症の症状が日常生活に及ぼす影響についてアセスメントすることに困難を抱いていた.

＜認知症高齢者への具体的な関わりを想像しづらい＞には，『理解できない人に理解してもらうにはどのようにすればよかったのか，考えるほど難しかった.』等が含まれ，学生は，認知症高齢者に適した看護計画を立案することに困難を感じていた.

【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】では，学生は，＜認知症高齢者の要求に答えられない辛さ＞を感じつつ，＜事実を理解してもらうことを前提に関わり，うまくいかない＞，＜対応方法がわからず混乱する＞と感じていたように，すでに認知症模擬患者が食事を食べたという事実について，学生は説明しようとするが，食べた記憶のない模擬患者には事実を聞き入れてもらえず，対応方法に苦慮していた.

【多くの看護問題に混乱する】では，学生は，『認知症患者の場合，たくさんの問題があり，統合するのが大変だった.』というように，アセスメントから抽出された看護問題の多さに混乱していた.

【ネガティブな結果を想像し不安になる】では，学生は，認知症

表 1　授業を受講した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
認知症高齢者の看護を想像することが難しい	認知症高齢者の状態を想像しづらい	認知症患者の状態を想像するのが難しかった.	佐々木美樹，2010
		認知症や麻痺のある対象者のイメージがつかない.	木島輝美，2011
	認知症高齢者の理解度を把握することが難しい	認知症の人がどの程度までわかっているのかの判断が難しい.	木島輝美，2011
		認知症患者の発言が正しいのかがわからず，展開していくことが難しかった.	佐々木美樹，2010
	認知症高齢者への具体的な関わりを想像しづらい	認知症の人にどんな看護をしたらいいのか具体的に書くのが難しかった.	佐々木美樹，2010
		理解できない人に理解してもらうにはどのようにすれば良かったのか，考えるほど難しかった.	
		話の内容を理解することが難しい患者に対し，どのような話し方や態度で接するべきか悩んだ.	
	認知症による症状を捉えにくい	認知症の疾患理解が難しい.	木島輝美，2011
		どこまでが症状で，どこからが問題なのかの区別をつけることも大変だった.	佐々木美樹，2010
		脳梗塞後遺症と血管性認知症，どちらが起因なのか，どちらも関係しているのか，掘り下げていけばいくほど混乱してきた.	佐々木美樹，2010
	認知症による日常生活への影響を捉えにくい	身体機能や認知機能など多くの要素を関連させて考えることが難しい.	木島輝美，2011
		ADLの低下が運動機能低下によるものか認知機能低下によるものか見極めが難しい.	木島輝美，2011
		認知症患者を様々なクラスターから考えた時，色々なことが結びつかず，一つ一つしか考えることができなかった.	佐々木美樹，2010
		各機能的健康パターンで認知症の影響を考えながらアセスメントをするのが難しい.	木島輝美，2011
		認知症が日常生活へどのように影響を及ぼしているのかを分析するのが難しい.	木島輝美，2011
		認知症の方のアセスメントは難しいと感じた.	佐々木美樹，2010
看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する	認知症高齢者の要求に答えられない辛さ	ずっとお願いされてしまうと断りにくくて辛い.	塚本都子，2009
		色々考えて対応したが「お腹が空いています。お願いですからご飯ください」と悲しそうに言われてしまうと辛い.	
	事実を理解してもらうことを前提に関わり，うまくいかない	ご飯を食べたという事実を理解して欲しかったが，患者が怒ってしまった.	
		「お腹が空いた，ご飯下さい」と言わせないようにと考えて行動したけど難しい.	
		説得するのは難しいと思った.	
		お昼ご飯まであと何時間と伝えても理解してくれない.	
		思いや意図が掴みにくいし，伝えづらい.	
	対応方法がわからず混乱する	何も考えられなくなってしまい，焦るばかりでした.	
		「お願いです．ご飯を下さい」と拝んでくる目を見た時，どう対応してよいか考えられなくなった.	
		どのように対応してよいかわからない.	
		今までに認知症の方とは接したことがなく，戸惑うことばかりだった.	
多くの看護問題に混乱する	多くの看護問題に混乱する	認知症患者の場合，たくさんの問題があり，統合するのが大変だった.	佐々木美樹，2010
		認知症だったため，看護問題をあげるのが大変だった.	
ネガティブな結果を想像し不安になる	ネガティブな結果を想像し不安になる	私の一言で怒らせてしまったらどうしようとずっと不安な気持ちで一杯だった.	塚本都子，2009
		話が続かなかったらどうしようとずっと不安.	

表２　実習を経験した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
学生にとって意味のわからない言動に困惑する	認知症高齢者の言動が矛盾していることに戸惑う	野球には興味がないといっていた患者が，野球に詳しかった時，矛盾していて驚いた．	桝本朋子，2008
		患者に指導する場面があったとしても，言ったことを忘れてしまうと，それが指導として活かされないことがあり困る．	石垣範子，2012
	同じやりとりに戸惑う	同じ話を何度もくり返し，話題を変えても，話が戻ってしまい困った．	古市清美，2012
		息子に関する発言の多さに戸惑った．	高野真由美，2016
		何回も同じことを言う方がいて，否定しちゃいけないと思い，聞いていたが，これは何回続くのだろうと思って，そのやり取りにとまどった．	石垣範子，2012
		初めは症状のひとつだから仕方がないと思ったが，同じことを何十回も言われると，少し嫌になった．	桝本朋子，2008
	意味のわからない言動に困惑する	散歩中に突然「便所」と言いズボンを脱ごうとされて対応に戸惑った．	嶋田美香，2006
		粉薬を吐き出す様子を見て汚いって思った．そして”どうしよう”と思った．	西村美里，2008
		依存の強い利用者が車いすからずり落ちたので，教員と指導者を呼び，車いすに引き上げてもらった．まさか，自分から滑り落ちるとは思わなかった．	道繁祐紀恵，2014
		ほとんど食事を食べていない認知症高齢者の方が「もういらない．わからない」と言い出した．学生が食事を促しても，スプーンを持ってくれないので困った．	千葉京子，2006
お互いの意思が通じない	話が噛み合わないので困惑する	アルツハイマー型認知症の方で，会話がほとんど成り立たなかったため，これから先，実習に取り組めるか不安だった．	桝本朋子，2008
		帰宅願望を訴える認知症高齢者に対して，学生が笑顔を見せたら「なんだ！？くそう！私を笑って！」と言った．学生はそんなつもりはなかったのでショックを受けた．	千葉京子，2006
		本人から自分が欲しい情報を聞き出すことが難しかった．	石垣範子，2012
	声をかけるが反応がなく戸惑う	こちら側の声掛けに対して反応がなくどうしてよいのか，わからなくなった．	古市清美，2012
		何度も声かけをするが，反応がない患者に対して，声かけをしてバイタルサインを測ろうとしたら，「やめろ」と大声を出された．	道繁祐紀恵，2014
	認知症高齢者の言いたいことを理解できずに困惑する	失語症や認知機能低下があり，何を伝えてくださっているのか分からない時があった．	森幸弘，2017
		認知症や失語症のために，自分の思いをうまく伝えられない利用者が多く，コミュニケーションを取りづらかった．	石垣範子，2012
		何を言っているのかわからなかったり，言いたいことが理解出来なくて悩んだ．	平木尚美，2008
	話の内容が真実なのかわからず戸惑う	毎回違うことを言われるので何が本当の話かわからずどのように答えたらよいのだろうと感じた．	嶋田美香，2006
		言っていることが本当なのか，わかっていることと，そうじゃないことの区別がわからないことがあって難しい．	石垣範子，2012
	説明しても理解してもらえない	転倒リスクがある認知症患者に杖の必要性を理解してもらえなくて困った．	川上遥，2013
		突然，家を出ようとするため，外に出ないように別の部屋に誘導するが，暴力・暴言が見られ，学生の言うことを聞いてくれないため困った．	川上遥，2013
認知症高齢者の意思表示に圧倒される	認知症高齢者に辛い気持ちを打ち明けられ困惑する	家族の負担になっているのではないかと訴えられとき，どのような対応がよいのか悩んだ．	古市清美，2012
		家族に迷惑がかかるから早く死にたいと話をされた時，声かけに困った．	石垣範子，2012
	拒否されたという事実にとらわれる	拒否される人への関わりに戸惑う．	川久保悦子，2017
		患者から事前に足浴の許可を得ていたが，足浴の準備をして訪室すると，「もうやらん」って言われて困った．	西村美里，2008
		毎日一生懸命ケアしている認知症患者に「あっち行け，近づくな」と言われて辛かった．	桝本朋子，2008
		実習目標として清潔の援助をあげていたため必死に入浴を勧めたが，拒否されいらいらした．	嶋田美香，2006
	興奮している状態に戸惑う	いきなり怒りをあらわにされた時，とても怖かった．	桝本朋子，2008
		大声で叫ぶ怒鳴る場面で驚いた．	高野真由美，2016
		利用者同士の会話がうまくいかず，その利用者のうちの1人であるAさんが激怒し，口論となった．	道繁祐紀恵，2014
		泣き始めた認知症高齢者に，「どうしたのですか」と尋ねてみたが，泣くことを繰り返すばかりであった．	千葉京子，2006

模擬患者とのロールプレイにおいて，『私の一言で怒らせてしまったらどうしようとずっと不安な気持ちで一杯だった.』というように，ネガティブな結果を招くのではないかと想像し，不安を感じていた．

2. 実習を経験した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容（**表２**）

実習を経験した看護学生の困難は，3 つのカテゴリーに分類された．

【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】には，＜認知症高齢者の言動が矛盾していることに戸惑う＞，＜同じやりとりに戸惑う＞，＜意味のわからない言動に困惑する＞が含まれ，学生にとって理解しがたい高齢者の言動に困惑していた．

【お互いの意思が通じない】では，＜声をかけるが反応がなく戸惑う＞が含まれ，学生が高齢者に話しかけるが,返答がなく困ったという内容で構成された．さらに，高齢者から返答があったとしても，失語症や認知機能低下の影響により，＜話が噛み合わないので困惑する＞，＜認知症高齢者の言いたいことを理解できずに困惑する＞というように，認知症高齢者との意思疎通に困難を感じていた．

【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】には，＜認知症高齢者に辛い気持ちを打ち明けられ困惑する＞が含まれ，高齢者のネガティブな発言に対して，学生はどの

ように対応すればよいか悩んでいた．

＜拒否されたという事実にとらわれる＞，＜興奮している状態に戸惑う＞には，『毎日一生懸命ケアしている認知症患者に「あっち行け，近づくな」と言われて辛かった．』，『大声で叫ぶ怒鳴る場面で驚いた．』等というように，拒否，叫ぶ，怒る等の感情をあらわにした高齢者に対して，学生は，どのように対応したらよいかわからず困惑していた．

Ⅵ．考　察

A．授業を受講した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容について

本研究では，わが国の看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容を整理した．その結果，授業を受講した看護学生の困難は，【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】，【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】，【多くの看護問題に混乱する】，【ネガティブな結果を想像し不安になる】に分類された．

看護学生は，＜認知症高齢者の状態を想像しづらい＞，＜認知症による日常生活への影響をとらえにくい＞，＜認知症高齢者への具体的な関わりを想像しづらい＞等というように，【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】と感じていた．このカテゴリーの基となった文献（木島，安川，武田，水野，奥宮，2011；佐々木，丸井，関，2010）では，3年生前期に開講された授業を受講した看護学生を対象としていた．そのため，学生は領域別実習を経験しておらず，認知症高齢者と関わった学生の経験も限られたものであったと推察される．さらに，近年の三世代世帯数の減少（厚生労働省，2018）や近所付き合いの希薄化（内閣府，2019；内閣府，2011）により，学生が高齢者の生活を知る機会も減少していると思われる．その結果，認知症高齢者の生活を想像し，看護展開していくことに，学生は困難を感じたのだと考える．

さらに，学生は，食事を食べた記憶の無い認知症模擬患者に対して，食事を食べたという＜事実を理解してもらうことを前提に関わり，うまくいかない＞，＜対応方法がわからず混乱する＞と感じていた．鈴木（2019）は，認知症の人をアセスメントする時は，視点を本人に向けることが大切であると述べている．このことを踏まえると，認知症高齢者の言動の意味を理解するには，本人の視点に立つことが必要である．しかし，学生は，「食事を食べた」という学生にとっての事実を基に，認知症高齢者を説得しようとしたため，【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】という状況に陥っていたのだと考える．

B．実習を経験した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容について

実習を経験した看護学生の困難は，【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】，【お互いの意思が通じない】，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】に分類された．

看護学生は，＜認知症高齢者の言動が矛盾していることに戸惑う＞，＜同じやりとりに戸惑う＞等というように，【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】と感じていた．このことは，授業を受講した学生が【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】ことと類似していると思われる．つまり，矛盾した高齢者の言動や何度も繰り返される高齢者の発言の意味を学生自身の視点で捉えようとしているために，困難を感じてしまうということである．そうではなくて，学生が認知症高齢者の視点に立って，高齢者の言動の意味を考えられるよう支援していく必要がある．

また，看護学生は，＜認知症高齢者に辛い気持ちを打ち明けられ困惑する＞ことを経験していた．大池，鬼村，村田（2000）は，対応困難な話題に関して学生は，患者本人の話を聞くより何か発言しようとする傾向があると述べている．このことより，学生は，高齢者の「死にたい」，「家族の負担になっているのではないか」といったネガティブな発言に対して，何か発言しないといけないと感じたものの，適切な言葉が見つからず困難を感じたのではないかと推察する．さらに，学生は，＜拒否されたという事実にとらわれる＞，＜興奮している状態に戸惑う＞ことも経験していた．これらのサブカテゴリーに分類された選定文献の記述に着目すると，学生は，「どのような対応がよいのか悩んだ」，「とても怖かった」というように，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】ことを経験し，それらの原因を特定しようとするまでには至っていなかったのではないかと考える．そのため，対応方法が見いだせず，困難を感じたのではないかと推察する．

C．教育への示唆について

授業を受講した看護学生は，【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】と感じていた．このことから，認知症高齢者の事例について，学生が看護過程を展開する際には，学生が認知症高齢者の生活をイメージできるよう，具体的に患者情報を記載する必要があると考える．また，映像教材等を活用し，学生のイメージを補う必要がある．

学生は，【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】，【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】

と感じていた．裘（2014）は，介護者が認知症をもつ人を理解できないと感じた時，認知症をもつ本人も想定外の結果に混乱しているため，介護者が「本人の混乱」に目を向け，「本人は何につまずいているのだろう」という目線を持ち，そのつまづきを支える必要があると述べている．このことを踏まえると，学生が，認知症高齢者の視点に立って，高齢者の言動の意味を捉えられるように学習支援を行うことが重要である．

さらに，学生は，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】ことを経験し，「どのような対応がよいのか悩んだ」，「辛かった」等と感じていた．三原，夛喜田（2001）は，学生が患者との関わりをとおして困った場面に関しては，臨床指導者および教員が，対応方法に焦っている学生の気持ちを受け止め，そこに何が起こっているのかを学生とともに考えることが必要であると述べている．このことを踏まえると，まずは，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】ことを経験した学生の気持ちを受け止めることが重要である．さらに，堀内，大渕，諏訪（2016）は，行動・心理症状のある認知症高齢者に対して，身体疾患が増悪していないか，内服薬の副作用が出現していないか等，認知症高齢者に負荷をかけている原因を確認し，改善していくことが重要なケアとなると述べている．そのため，認知症高齢者が拒否や怒り等の感情を表出した原因に学生が着目し，アセスメントできるよう学習支援を行うことが必要であると考えられた．

Ⅶ．結　論

1. 授業を受講した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容は，【認知症高齢者の看護を想像することが難しい】，【看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実にずれがあることに気づかないために混乱する】，【多くの看護問題に混乱する】，【ネガティブな結果を想像し不安になる】に分類された．
2. 実習を経験した看護学生が認知症高齢者に抱いた困難の内容は，【学生にとって意味のわからない言動に困惑する】，【お互いの意思が通じない】，【認知症高齢者の意思表示に圧倒される】に分類された．
3. 認知症高齢者の事例について，学生が看護課程を展開する場合，具体的な患者情報を提示するとともに，映像教材等を活用し，学生のイメージを補う必要性が示唆された．
4. 認知症高齢者の言動を本人の視点に立って学生が考えられるよう，支援していく必要性が示唆された．
5. 認知症高齢者が「拒否」，「怒り」等の感情を表出した原因に学生が着目し，アセスメントできるよう支援していく必要性が示唆された．

文　献

・千葉京子，草地潤子（2006）．介護老人保健施設における認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性．日赤武蔵野短大紀，（19），9-16.
・古市清美，高橋ゆかり，本江朝美，高岡素子（2012）．認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の困難感を抱いた場面．日看会論集：看総合，42，362-365.
・平木尚美，辻村史子（2008）．認知症高齢者との関わりで看護学生が感じた困難と対処行動．看保健科研誌，8（1），205-212.
・堀内ふき，大渕律子，諏訪さゆり（2016）．ナーシング・グラフィカ老年看護学②　高齢者看護の実践（第4版），pp.212-213，大阪：メディカ出版.
・石垣範子，深江久代，今福恵子，宮前典子（2012）．介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について．静岡大短大部研紀（26），43-55.
・桂晶子，佐藤このみ（2008）．看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ．宮城大学看護学部紀要，11（1），49-56.
・川上遥，小松遥香，中山朋美，藤井沙苗，藤井千裕，山田理恵，谷田恵美子，大元雅代（2013）．学生が初めて認知症患者と接したときに困難と感じたことの分析．インターナショナル Nurs Care Res，12（1），153-160.
・川久保悦子，井本由希子，伊藤まゆみ（2017）．老年看護学実習における学生が行うアクティビティケアの学び－「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」を用いた現状分析－．群馬パース大学紀要，22，11-22.
・木島輝美，安川揚子，武田かおり，水野智美，奥宮暁子（2011）．高齢者の生活機能に焦点をあてた看護過程演習の授業方略に対する学生の学びと評価－講義とリンクさせた看護過程演習とフィードバックの取り組み－．札幌医大保健紀，13，79-84.
・厚生労働省（2018）．平成30年国民生活基礎調査の概　況．https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/dl/01.pdf（2019/9/28 最終閲覧日）
・桝本朋子，合田友美，田邊美津子，須田厚子（2008）．看護学生の認知症高齢者との関係：印象に残っている場面での気持ちに焦点をあてて．川崎医療短大紀，（28），39-45.
・松本明美（2010）．認知症高齢者に対するイメージの縦断的調査と認知症高齢者看護観の形成．足利短大研紀，30（1），73-80.
・道繁祐紀恵，奥山真由美，甲谷愛子，杉野美和（2014）．介護老人保健施設およびグループホームにおける認

知症高齢者に対する看護学生の学び．山陽論叢，21，43-53.
・三原亜矢巳，夛喜田恵子（2001）．学生が困った場面を振り返ることの学習効果：精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より．名古屋市大看紀，1，63-71.
・百瀬由美子（2017）．認知症をもつ人に寄り添い尊厳を重視した対応力修得を目指す：認知症模擬患者を活用した演習（特集 認知症をどう教えるか：これからの基礎教育に求められるものとは）－（看護基礎教育における認知症教育の実際②）．看護展望，42（6），533-538.
・森幸弘，中尾奈歩，福田峰子，緒形明美，堀田清司，松田武美（2017）．老年看護学臨地実習における学生が認識する老年者とのコミュニケーション困難の内容と要因，生命健康科学研究所紀要，14，35-44.
・向井早霧（2017）認知症高齢者を支えていくための認知症サポーター養成講座の受講（特集 認知症をどう教えるか：これからの基礎教育に求められるものとは）－（看護基礎教育における認知症教育の実際③）．看護展望，42（6），539-543.
・内閣府（2019）．社会意識に関する世論調査（平成 31 年 2 月調査）．https://survey.gov-online.go.jp/index-sha.html（2019/11/28 最終閲覧日）
・内閣府（2011）．社会意識に関する世論調査（平成 23 年 1 月調査）．https://survey.gov-online.go.jp/index-sha.html（2019/11/28 最終閲覧日）
・日本老年看護学会老年看護政策検討委員会（2014）．老人看護専門看護師および認知症看護認定看護師を対象とした「入院認知症高齢者へのチーム医療」の実態調査報告書．184.73.219.23/rounenkango/houkoku/pdf/20141208.pdf（2019/9/20 最終閲覧日）
・二宮利治，清原裕，小原知之，米本孝二（2015）．日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究．厚生労働科学研究費補助金厚生労働科学特別研究事業平成 26 年度総括・分担研究報告書.
・西村美里，大町弥生，中山由美（2008）．認知症高齢者に看護学生が抱いた感情．藍野学院紀，22，11-21.
・大池美也子，鬼村和子，村田節子（2000）．初回基礎看護実習におけるプロセスレコードの分析：コミュニケーションのつまづき場面に焦点をあてて．九州大学医療技術短期大学部紀要，27，9-14.
・裵鎬洙（2014）．“理由を探る”認知症ケア　関わり方が 180 度変わる本（初版），pp.14-18，東京：メディカル・パブリケーションズ.
・佐々木美樹，丸井明美，関千代子（2010）．認知症のある高齢者の事例を用いたゴードンの機能的健康パターンによる看護過程演習後の学生の学び．医療保健学研究，1，67-76.
・嶋田美香，久原佳身，石橋富貴子，町島希美絵，佐藤亜希子，今村嘉子（2006）．学生が認知症高齢者と接するときに感じる困難感の内容とその対処行動．九州国立看教紀，9（1），8-14.
・新村出（編）（2018）．広辞苑（第七版），岩波書店.
・鈴木みずえ（2019）．3 ステップ式パーソン・センタード・ケアでよくわかる認知症看護のきほん，pp.33-34，東京：池田書店.
・高野真由美，松本佳子（2016）．老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち．川崎看短大紀，21（1），31-38.
・卓興鋼，吉田佳督，大森豊緑（2011）．エビデンスに基づく医療（EBM）の実践ガイドライン システマティックレビューおよびメタアナリシスのための優先的報告項目（PRISMA 声明）．情報管理，54（5），254-266.
・種市ひろみ（2017）．看護基礎教育において認知症教育をどう位置づけるか.（特集 認知症をどう教えるか：これからの基礎教育に求められるものとは）. 看護展望，42（6），518-523.
・塚本都子（2009）．認知症高齢模擬患者の参加型演習における教育効果－コミュニケーションに焦点をあてた分析から．日看会論集：老年看，40，147-149.
・World Health Organization（1992）／融道男，中根允文，小見山実，岡崎祐士，大久保善朗（2005）．ICD-10 精神および行動の障害 臨床記述と診断ガイドライン（新訂版），p.57，東京：医学書院.
・山口晴保（2018）．BPSD の定義，その症状と発症要因．認知症ケア研究誌，2，1-16.